



南葵音楽文庫ミニレクチャー

南葵音楽文庫で学ぶ西洋音楽史 (6)

ルネサンス期の音楽

「宗教改革と教会音楽の展開」

佐々木 勉

2019年9月6日

和歌山県立図書館南葵音楽文庫閲覧室



南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/>

南葵音楽文庫における宗教改革と音楽史に関連する参考文献など

- Geschichte der katholischen Kirchenmusik, heraus.v., K.G.Fellerer,
Vol. I 1972, Vol. II 1976, 765.02 GE1
- G.Reese, Music in the Renaissance, 1959 762.05 RE
- The New Oxford History of Music, vol.III "Ars Nova and Renaissance 1300-1540", 1960 762 NE3 「762 NE4
- The New Oxford History of Music, vol.IV "Humanism 1540-1630", 1968
- Source Readings in Music History, O. Strunk, ed. 1950 ナ/762/ST/
- 野村良雄『宗教音楽の歩み』1963 765.02 ノム
- 皆川達夫『合唱音楽の歴史』1965 767.4 ミナ
- 皆川達夫『中世ルネサンスの音楽』1977 762.04 ミナ
- Les Psaumes en Vers Francois, Retouchez sur l'ancienne version de C.Marot & Th. de Beze. Paris, 1679 M-5/35 「M-5/36
- Georg Rhau, Enchiridion Vtrisque Musicae practicae, Wittenberg, 1546

宗教改革と西洋音楽史

ルター派：「コラール」の成立

カルヴァン派：「詩篇歌」の成立

イギリス国教会：「アンセム」「サーヴィス」の成立

カトリック教会：一部を除き、中世に成立したセクエンツィアとトロープスの禁止

多声音楽のあり方の検討（言葉の理解）、世俗的ミサ曲の禁止

ヨーロッパ以外の地域への布教＝カトリック教会の音楽の伝播

フィリッポ・ネリによるオラトリオ会の活動 → 「オラトリオ」の成立

宗教改革年表

- 1517年 マルティン・ルター（1483～1546年）、ヴィッテンベルクで「95ヶ条の論題」を発表
- 1524 ルター派最初の聖歌（コラール）集《ヴィッテンベルク聖歌集》出版
- 1525 「教会音楽の父」ピエルルイジ・ダ・パレストリーナ（1525～94年）誕生
- 1534 ヘンリー8世「首長令」、「イギリス国教会」成立、修道院の解散 1534 信長誕生
- 1536 ジャン・カルヴァン（1509～64年）バーゼルで《キリスト教綱要》出版 1537 秀吉誕生
- 1540 イグナティウス・デ・ロヨラ（1491～1556）、「イエズス会」創設
- 1549 フランシスコ・ザビエル（1506～52年）によって日本にキリスト教が伝来
- 1552 日本で初めての「歌唱ミサ」
- 1565 ローマ枢機卿会議でミサ曲の改革について討議（言葉の理解）：世俗的ミサ曲禁止
- 1577 パレストリーナ、教皇庁礼拝堂の楽長就任、グレゴリオ聖歌改革に着手？
- 1582 天正遣欧使節（～1590年）がローマへ出発
- 1591 帰国した少年使節による洋楽の御前演奏（聚楽第）
- 1595 キリスト教禁教令。長崎で二十六聖人が殉教（キリシタン 30万人）
- 1605 長崎のコレジヨで《サクラメンタ提要》（19曲の楽譜を含む）印刷
- 1619 江戸幕府、キリスト教禁教令

マルティン・ルター《音楽の喜び Encomion Musices》（ゲオルク・ラウ《喜びしき調べ Symphoniae iucundae》1538年序文）

私、マルティン・ルターは、音楽という自由な技芸のすべての愛好者に父なる神と主なるイエス・キリストの恵みと平安が訪れますように。私は、すべてのキリスト教徒が音楽という嬉しい[神からの]賜りものを愛し、その価値を認めることを心から望みます。音楽は、神によって人類に与えられた高貴で価値ある、高価な宝物です。音楽の豊かさは計り知れず、あまりに尊いため、私が音楽について議論し、記述しようとしても、いつも舌足らずになってしまいます。すなわち、音楽は、神の御言葉に次ぐものであり、音楽という高貴な技芸は、この世で最も偉大な宝物なのです。音楽は、私たちの思考、精神、心、気分を制御します。私たちの教父も預言者たちも、理由なしに音楽が教会で使われることは望んでいません。一方、私たちは、多くの歌や詩編をもっています。この気高い賜り物は人間にだけ与えられており、それゆえに人間は、神は、自らへの賛美を表現するために私たちを創造されたのだ、ということに心を留めなければなりません。しかし、人間の自然な音楽能力が芸術になるように磨かれる時、私たちは、はじめて大なる驚きをもって音楽における神の知恵の偉大さと完全さ、すなわち神の創り給いしものと神からの賜り物を知ることになります。私たちは、1人の声が簡単な旋律を歌う音楽を聴く時、あるいは簡単な旋律を歌う声の周囲を3つ、4つ、5つの声が歌い、活発に動き回る時に驚きます。それは、それらの声とその簡単な旋律を芸術的な音楽の効果で素敵に飾り立てているかのようで、すべての人々が親しく、憂いがなく、互いを受け入れる天上の踊りを私たちに思い起こさせます。こうした考えに異論を唱え、音楽を神の驚くべき創造物と考えない人は、鈍重者であり、人と呼ぶにはふさわしくありません。そういう人は、口バの叫び声や豚のブーブーという鳴き声を聞いていれば十分です。



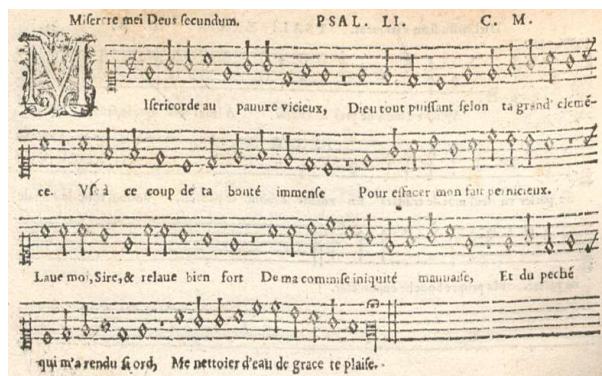
ジャン・カルヴァン《ジュネーヴ詩編歌集》読者への書簡1543年

拝啓 ジャン・カルヴァンよりすべての信徒と神の言葉を愛する人々へ

主日〔日曜日〕などに神に仕え、神を讃えるために開かれる集会に出席し、近隣における教会の礼拝にあずかり、礼拝を忠実に守ることは、キリスト教がまさに求めていることであり、〔信者にとって〕最も必要なことのひとつです。そして当然のことながら、礼拝を通じて教えを受けるために、すべての〔信者は〕教会で話されたことに耳を傾け、教会で行われていることを知るべきです。

…中略… 主が聖なる集会において守るよう命じておられるのは、簡単に言えば3つのことです。すなわち、主の御言葉の伝道、公的な荘厳な祈り、秘蹟の執行です。私は、疑問の余地はないので、今は伝道について語るのを控えましょう。秘蹟については、後で述べましょう。

公の礼拝について言えば、それには2つの種類があります。言葉のみによるものと、歌を伴うものです。歌を伴う礼拝は、近年になって発明されたものではなく、教会が生まれたときから存在しているものです。歴史書にも見出され、聖パウロさえも口で言葉を発するばかりでなく、歌っていました。そして事実、歌が、熱意をもって神に祈り、神を賛美するために人の心を動かし、たぎつけるための偉大な力を持っているこ



とを、私たちは経験によって知っています。また、聖アウグスティヌスが述べているように、歌は、愚かなものではなく、威厳をもったものです。またさらに、**食卓や家庭で人々を楽しませるために作られる音楽と、神や天使がおられる教会で歌われる詩編の間には、大きな相違があります。**

したがって、誰かが今ここにある [歌の] 形式を正当に判断してくれるならば、私たちは、その人がその [歌の] 形式が神聖で純粹であることを見出すように期待します。なぜならば、それは、これまで私たちが語ってきた教化にまさに向かっているからです。それによって、歌うという習慣が、拡大するかもしれません。神を賛美し、神に向かって心を捧げる際のオルガンのように、私たちは、家庭でも屋外でも神の美德や善意、知恵や正義について黙想することによって慰められます。聖霊が、神を喜ばせるために聖書に従って私たちを注意深く戒めるのは、理由のないことではありません。主は、いかに私たちが無意味に喜びがちであるかをご存じだからです。生来、私たちは、あらゆる馬鹿げた悪の喜びを求めがちですが、それとは反対に、主は、私たちを肉欲から遠ざけ、世の誘惑からそらし、主が私たちに勧める精神的喜びを得るためにすべての手段を与えて下さいます。人を慰め、喜びを与えるのにふさわしいものの中で、音楽は第一のもの、あるいは主要なものです。私たちは、音楽を人を慰めるための神からの賜り物と考えなければいけません。こうした理由から、音楽が私たちの利益と福利に供されるとき、音楽が非難されることがないように、私たちは、音楽を乱用せず、汚し、悪用しないように注意深くならなくてはなりません。

さて、こうした考察に限定するとすれば、**音楽が良い評価を得るように、そして音楽が自堕落の、あるいは誤った喜びへと堕落する原因とならないように、さらには音楽が好色や恥知らずの手段にならないように、節度をもって音楽を使用する必要があります。**プラトンが真剣に考察したように、この世界には、道徳を歪める力が [音楽より] 強いものはありません。事実、私たちは、経験によって音楽が秘密の、まったく信じられない力で私たちの心を動かすのを知っています。

私たちは、私たちにとって有害ではなく、有益な方法で音楽を用いることを勤勉に学ばなければいけません。したがって、初期の教父たちは、当時の人々の不誠実で恥知らずな歌について不平をもらしています。彼らが、そうした歌を世界の堕落をもたらす悪魔の毒と呼ぶのは当然のことです。このように音楽について語ってきて、私は、2つのことを理解しました。すなわち、言葉、あるいは主題、そして歌、あるいは旋律です。聖パウロが述べているように、すべての邪悪な言葉が、善行を堕落させるということは、事実です。しかも、それが旋律を伴うとなると、まるでワインが漏斗で樽に注ぎ込まれるように、人の心を強く打ち、心に入り込んでしまいます。結果的に、毒と堕落は、旋律によって心の極めて深い部分で蒸留されることとなります。では、どうすればいいのでしょうか。誠実なばかりでなく、神聖な歌を手に入れるべきなのです。

…中略…何人たりとも、神が与え給う救いに値するほどに歌うことはできないのです。したがって、私たちがあらゆる方面を手を尽くして探しても、**聖霊がダビデ王を通じて発し、作った詩編よりも優れた歌、あるいは神を賛美するという目的に詩編よりふさわしい歌は見いだせません。**私たちが詩編を歌う時、私たちは、神ご自身が自らの栄光を讃えるために私たちの中で歌っているかのように、神がその言葉を私たちの口にのぼらせていると確信することができます。聖クリソストモスは、男、女、そして子供たちに詩編を歌うことに慣れるように熱心に説いています。それは、詩編を歌うことが、彼らを天使たちと仲間になるような瞑想をいだかせるからです。…中略…この詩編歌集は、神の道に従って隣人たちと共に誠実に生きようとする人々から愛されることでしょう。したがって、それ自体に価値があり、称讃を受けるのであれば、私が、これを強く推薦することはありません。**みなさんは、以前 [教会で] 歌っていた歌、すなわち空しく軽薄な歌や愚かで退屈な歌、さらには下劣な歌、邪悪で有害な歌は避けるべきです。**今後は、これらの聖なる天上の賛美歌を善き王ダビデと共に歌っていこうではありませんか。旋律については、従来言われてきたことに従って、それが主題に適切で、教会で歌われるのにふさわしい重みと威厳を保つように、私たちが採用している方法によって調整されるのが最も良いように思われます。 1543年6月10日 ジュネーヴにて